

近代日本と産業合理化

——「能率」をてがかりに——

成城大学

新倉貴仁

1 目的

本報告の目的は、「能率」の概念を手がかりとして、近代日本における産業技術の変容とその社会学的意義を探究することにある。

産業合理化や「能率」の概念は、第一次大戦前後に日本に導入されたテーラーの科学的管理法に由来し、その展開については経営史における蓄積がある。他方、産業社会学は「労働」をめぐる問題として科学的管理法を論じてきた。本報告では、これらの知見を踏まえつつ、戦前の日本における「能率」が、人々の身体を変容させる身体技術であるという観点から、その歴史的展開を考察する。

2 方法

本報告の理論的枠組みは、マクルーハンのメディア論とフーコーの身体技術論の交錯するところにある。1960年にダニエル・ベルは、『イデオロギーの終焉』のなかで「能率の崇拜」という文章を表し、そのなかでベンサムのパノプティコンから議論をはじめている。すなわち、「能率」とは、フーコーが規律訓練権力を論じたような身体技術の一つであるといえる。

対象としては、大阪府立産業研究所によって開催された1924年と1935年の能率展覧会を取り上げる。特に、どのような問題が当時の「能率」の対象として分節化されていたのかということに注目する。あわせて同時期に出版された「能率」に関わる文献や資料に言及し、権力論の観点から分析していく。

3 結果

第一次大戦前にさかのぼる科学的管理法の紹介と導入から1930年代の産業合理化まで、「能率」は達成すべき目標を表現する概念であると同時に、その目標を評定するための尺度であった。産業にまつわる様々な側面が、計算・考量可能な諸要素へと分解されていく。そこには、企業や工場の組織編成、照明や通気や温度や湿度や騒音といった環境への配慮、規格や標準化、工程や在庫の管理、原価計算や予算統制といった会計の技術、そして栄養や睡眠や疲労から適性検査までもを含んだ労働者の身体への配慮が含みこまれている。また、能率は、工場という生産の場に限定されるものではなく、商店や事務、運搬、交通、通信機関、学習、そして家庭生活まで拡大されていく。

4 結論

「能率」とは科学的管理法の目的・手段であると同時に、人間の身体や動作の測定についての知である。それは、いわば「人間の機械化」ともよべるような現象の総体のなかにある。さらに、そこで測定されたデータは計数化の技術と接続され、戦後の電子計算機の導入等をつうじて情報化社会を準備する。すなわち、「能率」は、産業社会から消費社会へ、そして情報化社会へという「現代社会」化を考えるための重要な問題領域であるといえる。

文献

Bell, Daniel, 1960, *The End of Ideology*, Cambridge, Glencoe: Free Press.

見田宗介, 1998, 『現代社会の理論』岩波書店.

佐々木聡, 1998, 『科学的管理法の日本的展開』有斐閣.

高橋衛, 1994, 『「科学的管理法」と日本企業——導入過程の軌跡』御茶の水書房.